

教員の授業改善につながる校内研究支援の在り方

- 研究推進校が目指す児童の具現化と教員一人一人の自律的な学びに資する校内研究支援を通して -

主 幹・指導主事 志村 貴美子 主 査・指導主事 渡邊 信也
副主査・指導主事 小林 裕直 指導主事 有賀 拓也
指導主事 内田 由布

キーワード 目指す児童の具現化への支援 教員の自律的な学び 「学びの充実シート」

主題設定の理由

総合教育センター（以下本センター）では、学校現場のニーズに応じた校内研究支援を進めることを目的とした「研究支援」に取り組んできた。これは、本センターが学校に対してどのような支援を行うことができるかを探るものである。小学校チームでは今年度も学校教育支援を目的とし、研究推進校と協同的に「授業づくり・学校づくり」を推進する実践研究を行っていくこととした。

校内研究は、児童の教育のために、教職員が協同で行う研究である。児童の実態を適切に把握し、目指す児童の姿を具現化するにはどうすればよいか研究の中心となる。しかし、教育課題が多様化・複雑化する教育現場において、校内研究の進め方に多くの学校が様々な悩みを抱えており、研究の成果が教員一人一人の授業改善につながっていないケースが見られる。そこで本研究では、研究推進校と互いに意見を出し合いながら支援の在り方を探ることを通して、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善につながる校内研究に着目した。

令和7年度、小学校チームは、新たに研究推進校となった南アルプス市立櫛形西小学校と研究を進めた。具体的な取組としては、学校の要望を踏まえ、本センターのシンクタンク機能を生かした支援を行い、研究推進校における校内研究の活性化を目指す。更に、拡大校内研究会及び研究大会等において研究内容を県下に広げ、各学校の校内研究の活性化につなげるとともに、各学校への有効な教育支援の在り方を探りたいと考えた。

研究の目的

教員一人一人の授業改善につながる校内研究を目指し支援を行い、研究推進校に対してどのような成果と課題をもたらしたかを検証し、学校における校内研究への支援の在り方を探る。

研究の方法

- ・校内研究の運営に関する連絡を密にし、管理職や研究主任との連携を図る。
- ・研究主題を具現化するために、学習会、指導案検討、研究授業、研究会などにおいて情報提供や指導・助言をする。
- ・PDCAサイクルに基づいた教員の授業改善を支援する作成物を活用し、教員の自律的な学びを促進する。
- ・検証の手立てとして質問調査を実施し、校内研究に対する意識の変容を見取る。

研究経過

1 センター研究日

4月9日（水）オリエンテーション

- ・研究計画の検討、支援内容の確認

5月13日（火）研究計画発表会

5月19日（月）山梨大学連携・教育研究会

6月18日（水）1学期の支援内容の検討

7月15日（火）夏期休業、2学期の支援内容の検討

9月17日（水）中間発表会

10月21日（火）2学期の支援内容の検討

11月13日（木）3学期の支援内容の検討

11月17日（月）山梨大学連携・教育研究会

12月12日（金）研究大会の発表内容の検討

1月20日（火）所内発表会の検討

1月29日（木）所内発表会

2月4日（水）研究紀要の内容の検討

- 2月19日(木) センター研究大会
- 3月4日(水) 来年度の方向性の検討

2 学校訪問

【南アルプス市立櫛形西小学校】

- 4月11日(金)
 - ・委嘱状交付 ・打ち合わせ
- 4月16日(水)
 - ・センター研究概要説明
- 6月5日(木)
 - ・授業参観
- 6月11日(水)
 - ・学習会(センター指導主事)
 - 「授業改善～道徳科における主体的・対話的で深い学びについて～」
- 6月19日(木)
 - ・特別研修会
- 6月25日(水)
 - ・学習会(山梨大学アドバイザー招聘)
 - 「授業改善～国語科における主体的・対話的で深い学びについて～」
- 7月9日(水)
 - ・学習会(センター指導主事)
 - 「QUを活用した集団づくり」
- 8月21日(木)
 - ・学習指導案づくり
- 9月10日(水)
 - ・学習指導案検討
- 10月8日(水)
 - ・一人一実践授業への指導・助言
- 10月15日(水)
 - ・一人一実践授業への指導・助言
- 11月6日(木)
 - ・拡大校内研(山梨大学アドバイザー招聘)
- 11月26日(水)
 - ・一人一実践授業への指導・助言
- 1月14日(水)
 - ・学習会(センター指導主事)
 - 「特別支援教育について」
- 2月5日(木)
 - ・一人一実践授業への指導・助言

具体的な取組

小学校チームでは、南アルプス市立櫛形西小学校を研究推進校に指定し、研究支援を行ってきた。推進校の要望に沿った支援を行い、校内研究が活性化されるように努めた。本センターの機能を活用しながら学校全体の授業力向上を目指し、教員一人一人の授業改善につなげるとともに、年間を通して校内研究の目的が意識できるように支援を行った。その研究支援が研究推進校のニーズに応えるものになるよう、管理職や研究主任と相談の上、支援計画を決定した。

1 研究推進校が目指す児童の具現化に資する支援

櫛形西小学校は推進校1年目ということで、管理職や研究主任とどのような支援が有効であるか丁寧に検討を進め、研究支援を行った。櫛形西小学校が年度始めに課題としていたことは、「授業づくり」と「学び合う活動の充実」であった。研究主題である「他との関わりの中で、互いに学び合う児童の育成～授業から生活へ広がる『学び合い』の実践を通して～」のもと、支援計画を立てた。

年度始めの校内研究会にはセンター指導主事も参加し、センター研究や研究推進校としての具体的なイメージを全職員と共有した。そして、推進校と相談の上、教科指導や学級経営、特別支援教育に関する学習会を行った。学習会の講師は、本センター指導主事や山梨大学アドバイザーが務めた。

櫛形西小学校は、1学期に各学習会で学んだことを生かして、2学期以降一人一実践や拡大校内研での研究授業に取り組んだ。一人一実践では、本センター指導主事が学校の要望を受け、当日の授業を参観し、事後研究会で指導・助言を行った。拡大校内研では、算数科の授業実践が提案された。その授業に向けて指導案検討を全教員で行い、算数科の深い学びを目指し支援を行った。

(1) 学習会の実施(教科・学級経営・特別支援教育について)

推進校と打ち合わせをする中で、今年度は道徳科と国語科の授業づくり、学級経営や特別支援教育についての学習会が計画された。それらの学習会に、本センターや山梨大学から講師を派遣した。

【6月11日 道徳科の授業づくりに関する学習会】

本センターの志村貴美子指導主事が講師を務めた。前半は、道徳科における主体的・対話的で深い学びについての講義を行った。後半は、実践事例の視聴を行いながら、自分のクラスを想定し構想した授業について対話を行った。学習会後には、「自分事として捉えるようにする。」「導入を工夫していきたい。」と振り返りがされた。

【6月25日 国語科の授業づくりに関する学習会】

山梨大学アドバイザーである渡邊昭二郎教授に講師を依頼し、当日の講師を務めていただいた。「資質・能力を育成すること」や、「言語活動について」、「言葉による見方・考え方を働かせるとはどういうことか」という内容の学習会であった。推進校の先生からは、「主体性や言語活動を考える前に、まずその単元の目標を確認して、何をねらいとしているのか、児童にどのような資質・能力を身に付けさせるのか教材研究をすることが大切である。」という声が聞かれた。

【7月9日 学級経営に関する学習会】

本センターの花輪恭子指導主事が講師を務めた。「QUを活用した集団づくり」というテーマで、QUの特徴や分析方法についての講義や、実際に学級のQUを分析するワークショップを行った。参加した先生は「子供たちが友達と関わる際に、自分の意見だけでなく相手の意見も聞き、受け入れることができるように声かけ等をしていきたい。」と振り返っていた。

【1月14日 特別支援教育に関する学習会】

本センターの若槻洋貴指導主事が講師を務めた。「特別な支援を必要とする児童の理解と対応について」というテーマで学習会を実施した。この学習会は、年度途中に学校からの要望で計画されたものだが、推進校と密に連絡が取れていたことにより、ニーズに柔軟に対応することができた。学習会後の振り返りには、「一人一人の特性を日常場面で理解していく。また、発達障害の困難さである壁（障害）を引き下げていくために、まずは教師が視点を変えて接していき、クラスの子供たちの関わりを変えていきたい。」という記述が見られた。

学習会を通して、学校全体で具体的に授業の在り方や学級経営、特別支援教育について学習を深めたことは、推進校が目指す児童の具現化を実現していく上で大切な機会となったと考えられる。

（2）一人一実践の取組

楡形西小学校では2学期以降に一人一実践が計画され、それぞれの先生が実践する教科を選び、授業実践を行った。教員全員で授業を参観し、放課後に校内研として研究会を設けた。事後研究会では授業提案から教員全員で学びを深める機会としていた。

8月21日に一人一実践に向けた授業づくりという内容で校内研を行った。今年度の一人一実践では、国語科、算数科、道徳科、社会科の授業実践が予定されていたため、本センターから3名の指導主事が校内研に参加し指導・助言を行った。推進校の先生からは、「子供たちの反応を予想して、考えの深まる展開を考えていきたい。」「授業を行う上で自分が大切にしたいこと、目指す児童の姿を大切に実践していきたい。」という振り返りがなされた。

2学期に入り、一人一実践が行われた。提案授業の担当指導主事が当日学校訪問し、授業参観と、事後研究会での指導・助言を行った。推進校に行ったアンケートには、「学習会や一人一実践などを通し、自分自身では気付くことのできないポイントや、授業を行っている中で自分ができていない部分の解決策のヒントを発見することができよかった。」と書かれていた。一人一実践の取組を通して、日常の授業改善を意識することで学校全体としての授業力向上につながる取組となった。

（3）拡大校内研に向けた指導案検討

9月10日に拡大校内研で行われる研究授業の指導案検討を行った。検討会のファシリテートを本センター指導主事が行い、授業者の本実践におけるねらいや思いを尊重しつつ、推進校の先生方主体の検討会となるよう必要に応じて助言を行った。

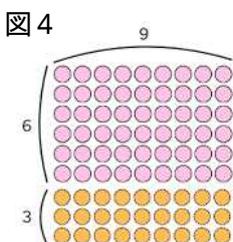
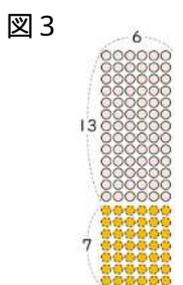
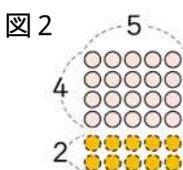
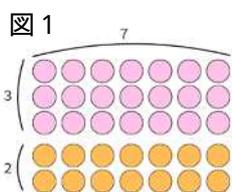
推進校の先生からの振り返りにおいて、「具体物を使うことの利点や児童の実態に合わせた授業の流れを構想することの大切さを学んだ。」「具体と抽象の違いについて学ぶことができた。また、問題との出会い方を工夫することで、効果的に教師の意図を組み込むことができると改めて感じた。」という記述が見られた。一つの授業について全教員で検討し合うことで、教員一人一人が課題意識をもち自分の実践につなげていこうとする機会となった。

(4) 拡大校内研究会の実際

11月6日に第4学年の算数科において研究授業・研究会を行った。実施単元はA「数と計算」領域の(6)「数量の関係を表す式」(7)「四則に関して成り立つ性質」である。総時間数9時間のうち、5時間目を本時に設定し、「数や式の形に着目して、分配法則が適用できるかを考え、計算方法を説明することができる」という目標のもと、研究授業を行った。研究授業には6名の児童が参加した。

ア 研究授業の様子

まず、図1の中に配置されたピンクとオレンジの丸の合計数を求める問題を提示した。児童は、ピンクの丸(3×7)とオレンジの丸(2×7)を個別に計算して合わせる方法と、縦の合計数($3 + 2$)に横の数(7)をかける方法の2つを導き出し、どちらも答えが「35」で等しくなることを発見した。この結果から、答えが同じであれば2つの異なる式を等号でつなげられることを確認した。



次に、図2～4を提示し、それぞれの図においても図1と同じことが言えるか予想させ、「他の場合でも2つの式を等号でつなげることができるか」をめあてとした。そして、児童に図2～4の3つの図の中からどの図について考えるかを選択させ、2つの方法から得られる式が等号で結べるかどうかを自力解決させた。解決の際に迷ったり困ったりしたときは近くの友達に相談しながら解決を進めていた。約10分間の個別学習の後、友達同士で自分の考えを説明し合う時間に入った。6名の児童は、はじめ3つのペアに分かれて説明に入ろうとしたが、どのように分かれるか悩んでいると、ある児童が「全員でやろう。」と提案したため、全員で一人一人の発表を聞き合った。1名の児童(以後、児童A)が前時の課題と混同

し、2つの方法から分配法則を見つけるのではなく、丸の数を分けたり移動したりして工夫して計算する方法を考えていた。その説明を聞いた他の児童は、その説明をくみ取りながら本時の課題について再確認をさせていた。課題に対して理解した児童Aは、その場で解き直し、他の児童はその様子を見ながら手助けをしていた。

教師は全員の発表を聞きながら黒板に概要を記録し、全員の発表が終わった後、その記録を基に全体検討に入った。まず、縦の合計数に横の数をかける際に、合計数に括弧をつけ忘れていた児童がいたため、既習を振り返りながら正しい式表現について検討を行った。その後、図2～4も2つの異なった方法で同じ解が得られたことから、それぞれの式表現が等号で結ばれることを確認した。

授業の終了時刻が迫っていたため、当初予定していた「や」などの記号を用いた式への一般化までは行わず、板書を基に本時を振り返りながら次時への見通しをもたせ、学習感想を書かせたところで授業を終えた。

イ 事後の研究会

事後研究会では、まず授業者から本時における児童の姿や指導のポイントが授業の過程に沿って述べられた。導入の場面では「問題場面と式との関連付け」を重視した結果、「式と図のつながり」を確かめながら全体で確認をしていく形となったこと、展開の場面では、3つのドット図から考える場面において、子供たちは自分なりに選んだ図について説明するために一生懸命取り組んでいたことが挙げられた。普段よりも児童一人一人が自力で頑張ろうとしていて、具体と抽象を行き来しながら友達と相談したり集まったりして考える姿が見られたこともよかった点として挙げられた。課題としては、「『2つの式を等号(=)でつなぐ』という操作の意味をいかに子供たちが捉えていたか」という点に焦点が当てられた。バラバラの式を1つの式に表して等号でつなげることについて、十分に子供たちが理解しておらず、「答えが等しいから等号でつなげる」という整理の仕方となってしまった。したがって、もう少し子供に伝わりやすい言い方をしていくことが、今後に向けての授業者本人の改善点であることが述べられた。また、分配法則について、「 $(+) \times$ といった一般化された形でまとめるところまでは到達できず、「括弧がついている式とついていない式がある。」とい

う気づきを拾うところまでとなったので、次回につなげたい、という授業者の次時への見通しについても語られた。

グループ協議では、「教室の雰囲気や子供の学びの成立」を柱とし、さらに4つの視点に分けられ、その視点に沿って話し合いが行われた。1つ目の「教師のファシリテート」については、「子供の学びの状況を見ながら対応していたことが良かった。」「教師と子供との関係のよさが出ていた。」という意見と共に、「子供の考えを板書し『どういう意味だと思う?』』というような全体で考える場面があってもよかった。」という深めるためのアイデアも出された。2つ目の「課題設定の内容とレベル」については、「めあて自体は難しくとれるが、内容的にはすぐに到達できそうな課題であった。」「『学びの必然性』に通じる動機づけや意欲づけが意識できるとよかった。」という意見が出され、授業づくりの基盤となっていく点について話し合われた。3つ目の「振り返りやまとめ」については、「まとめはめあてと一致した方がよい。」「具体的なものから一般化していくことの難しさがあった。」という意見が出され、学びを言語化する意義に触れられた。4つ目の「授業者からの課題(分配法則について)」は、「授業は式の面白さに繋げる意図があり、分配法則へのつながりも伝わってきた。」「中学や高校へと発展していく学習であるので丁寧に扱いたい。」など、内容の発展に関わる意見が出された。

【山梨大学アドバイザー笠井さゆり准教授からの指導・助言】

「計算のきまり」の単元の教育的価値について、学習指導要領を根拠としながら授業実践とどのように結びついていくかについて御教授いただいた。本時においては、教室に質の高い「学び合い」ができる関係性が育まれていたことから、授業場面の中でも特に「比較・検討場面で練り上げること」について焦点が当てられ、「誰の意見から取り上げ誰につなげて考えていくか」など、目標に近づくため、練り上げをすることの重要性について御教授いただいた。ヴィゴツキーが提唱する「発達の最近接領域」にも触れられ、「学び合い」が子供同士の関わり合いを生み、育ちにつながっているとの御教授いただいた。また、児童の思考が質的に変化した瞬間(「括弧は色の塊で計算している。)」も取り上げられ、分配法則の学習における思考の

抽象化は大変価値があること。また、藤井齊亮氏が提唱する「擬変数」の概念とも関連していることを御教示いただいた。最後に今後目指すこととして、「子供と授業をつくる」「考えのよさを味わえるようにする授業づくり」について御指導いただいた。

(5) 目指す児童の具現化に向けた本センターの支援について(研究推進校から)

研究推進校より、研究支援について以下のような意見をいただいた。

研究主任として

- ・初めて研究主任として校内研究を進めていく上で、計画段階からセンター指導主事がかかわってくれたことが助かった。
- ・学習会の内容や、指導主事を招いた学習会を企画しその内容まで相談できたことがよかった。

校内研究のデザインやマネジメント

校内研究全体を通して

- ・各教科専門の指導主事から指導をもらうことができたので、教科の専門性を高めていくことができた。
- ・授業づくりの校内研(夏期休業中)で、各自が決めた教科について、単元構想の段階から相談にのってもらえたことがよかった。
- ・「学びの充実シート」を活用した振り返りを通して、校内研究で得た学びを自分の授業にどのように生かしていくかを考えることができた。その積み重ねにより、日常の授業実践へとつなげようとする意識が、職員全体に少しずつ広がってきたように感じる。

授業改善に向けた学びの場

2 教員一人一人の自律的な学びに資する支援 「学びの充実シート」について

研究推進校の校内研究を支援するにあたり、本センターでは令和6年度から取り組んでいる、「学びの充実シート(以下、本シート)」(図5)の活用を提案した。

図 5

RO年度 学びの充実シート		名前
学校教育目標		
研究主題		
今年度重点的に育成を目指す資質・能力		
【見通し】育成を目指す資質・能力に向けて、取り組もうと考えていること		
◆Keep (よさ・継続すること)		
◆Try (今年度取り組んでいきたいこと)		
◆Problem (課題)		
校内研究会から学んだことを明日の授業に生かそう！ ～授業アップデート～		
月 日	授業	学んだこと(授業で明らかになった有効な手立てや改善策など) 明日からの授業で活用したいこと 今後、検討したいこと
【振り返り】		
◆Keep (よさ・継続すること)		
◆Try (今後取り組んでいきたいこと)		
◆Problem (課題)		
◆次年度に向けて学びたい内容や受講したい研修等		

本シートは、教員が校内研究における学びを日々の授業改善に生かしていくことを目的としている。教師自身が校内研究での学びの振り返りを行うことにより、学んだことを自分自身で捉え直し、一人一人の自律的な学びへとつなげることをねらいとしている。研究を進めていくと、研究授業自体が目的になってしまい、学校教育目標や研究主題とのつながりが希薄になってしまうことがある。そのため、本シートを活用することで、教員が学校教育目標や研究主題などに立ち返ることができるようにし、その上で、教員自身が自己の目標を設定して、見通しをもちながら授業改善を図ることができるよう本シートを作成した。

(1) 研究推進校での活用方法

年度始めの校内研究会において、本センターから研究推進校に対し本シートの説明を行った。特に意識する点として、校内研究の各回の学びを振り返り、自分自身の授業に生かしていく視点をもつことを挙げた。そして、その実践のために「学びの充実シート」に取り組むことを伝え、各回の校内研究の中に時間を位置づけ、振り返りを実施した。

(2) 授業改善に生かす具体的事例

ここでは、教員Aの記述を提示しながら、実際に校内研究での学びをどのように授業改善に生かしたのかを示す。

以下は、教員Aの本シートへの記述である。

月	校内研内容	記述内容
		学んだこと 明日からの実践で活用したいこと
8月	一人一実践に向けた授業づくり	分配法則に至るまでの過程を大切に。式と図を結び付けた説明・理解ができるように。条件を変えた見方ができるように普段から教師が意識的に問いかける。
9月	指導案検討	問題との出合わせ方、具体と抽象の行き来、説明モデル、きまりへつなげるための板書。子供のつぶやきを板書に残す。何を説明させるのか、ねらい、意図を明確に。
10月	一人一実践(教員Aとは別の教員)	フリートーク、子供が互いの意見を聞き合える関係、自分だったら何ができるか、という視点をもたせる。子供の意見・発言で授業を展開する。板書で整理。
10月	一人一実践(教員Aとは別の教員)	単元の学習を通して子供が何を理解できればよいのか、ねらいを明確にする。調べる整理・分析が大切。単元構想をしっかり持つ。
11月	教員Aの授業実践	少人数での学び合い、考えの共有はペアやグループで行うこともあれば、その場の状況に応じて全員で行うこともできる。考えを練り上げていくことが、きまりとして一般化することにつながる。子供のつぶやきや発言を拾ってつなげていく、考えを一緒に整理する。
11月	一人一実践(教員Aとは別の教員)	「書く」活動では、目的意識、相手意識を持たせて取り組むことが大切。文章の構成・内容に関わる子供のつぶやきや発言に対する教師の問い返し、考えの共有。

8月に行った、一人一実践に向けた授業づくりの校内研から、2学期以降の一人一実践の授業参観・授業実践の振り返りを追ってみると、「授業のねらい、意図、目的」を明確にすることや、「子供

のつぶやき、発言」を大切に記述などが見られた。実践授業は毎回異なる教科で実践されたが、どの教科であっても授業に対する教員Aの視点が焦点化されていったことを見取ることができた。授業を参観するときだけでなく、授業をつくる際にも軸となる視点が明確になっていったと考える。11月は教員Aが実践をした授業である。()本実践における教員Aの指導案から、レディネステストの結果を基に児童の課題を把握、児童の目線に立ったスモールステップを意識した単元計画、本時の展開を構想していることが見て取れる。授業をする際に、子供主体の視点に立ち、目の前の児童の実態を踏まえながら授業を考えていると言える。授業参観の際も、同様に授業の目標と児童の姿をつなげながら観察していることが振り返りから見て取れる。

以上、教員Aの本シートの記述内容や指導案の内容から、校内研究会を通して自身の学びを深め、その学びを日々の授業に結び付け、継続的な授業改善につなげようとする姿を見取ることができた。

(3)「学びの充実シート」の有効性

校内研究支援の視点から、本シートの有効性について整理する。

研究推進校の「学びの充実シート」に対する充実度・満足度は73%が高い又はやや高いという結果となった。以下は、「学びの充実シート」を肯定的に捉えた意見である。

自分の実践や普段の指導について振り返る機会になりました。また、毎回の校内研で得られた気づきを見返すこともできるので、自分の考えなどが整理できると感じました。

今までの授業の進め方や指導方法を振り返ることができるのと同時に新たな指導方法や授業の組み立てや学び合いの仕方を改めて考える手立てとなりました。今後もこの「学びの充実シート」を活用していくことはとても良いと感じます。

学んだことを振り返ることができ、日々の実践に活かすことができた。また、校内研の時間で記入する時間を確保していたことで入力にも負担をあまり感じなかった。

研究推進校では、校内研究の時間内に振り返りの時間を設けた。校内研究の学びから自己を振り返り、授業改善に生かそうとする姿を見取ること

ができた。「時間内に学びの記録を残すことができる。」「時間が経過してからも過去に遡って学びの記録を確認することができる。」など、他にも肯定的な記述が多く見られた。

一方で、以下のような課題も挙げられている。

教職員一人一人が校内研を振り返るきっかけとなったが、事後にいかすことができたかどうかは分からない。チェック項目を掲げておき振り返りを継続していくことで、校内研の改善につながっていくのではないかと考えた。

自分自身の研究を振り返ることができるとても便利なものでありました。一方でツールとされているこのシートが、研究と振り返りを隔ててしまっているような感覚があり、振り返りをさらに、他の先生と共有しながら対話し深め合えたらいいなと思いました。

振り返りを行う意義を踏まえたシート活用の目的や、負担感を少なくして継続していける方法など、十分な共通理解が図れていないことも明らかとなった。今後、このような意見を大事にしながら、研究推進校との共通理解を図っていく必要がある。



6月25日国語科授業づくり学習会



8月21日一人一実践に向けた授業づくり



11月26日一人一実践授業後のリフレクション

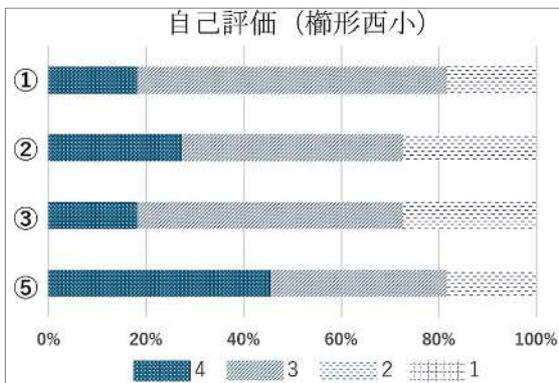
3 アンケートの実施

本研究の検証の手段として、研究推進校の教員を対象に、11～12月にアンケートを実施した。

アンケート項目及び結果

<p>校内研究における学習会の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 道徳科の授業改善学習会 (6 / 11) ・ 国語科の授業改善学習会 (6 / 25) ・ 学級経営に関する学習会 (7 / 9) ・ 特別支援教育に関する学習会 (1 / 14) <p>校内研究における研究授業の実施 (指導案検討、研究会等)</p> <p>「学びの充実シート」の活用</p> <p>「学びの充実シート」に関する意見</p> <p>校内研究への取組の姿勢 (主体的に取り組めたか)</p> <p>校内研究による自身の授業改善の成果</p> <p>校内研究による自身の授業改善の課題</p> <p>今後取り組みたいこと</p> <p>センター研究に関する意見・感想</p>

～、は充実度・満足度の自己評価尺度として「4：高い」「3：やや高い」「2：やや低い」「1：低い」で評価、～は記述で回答



(回答者数 11 名)

< 記述回答 >

「学びの充実シート」の活用
(2 (3) 参照)

校内研究の中で感じた授業改善における成果
(記述回答より)

- ・それぞれの時間で必ず学びのある校内研究会であったと思う。それを日々の授業に生かしていこうと思えるものだったので、意識しながら授業を進められたのではないかと思う。
- ・通常の校内研において指導主事の先生を招いた学習会は数少ないと思う。ほぼ毎回、講師として指導いただけたことは、とてもいい機会であった。

- ・拡大校内研を終え、子供のどんな考えを取り上げ、どのようにつなぎながら授業を展開していくか、以前よりも意識するようになった。
- ・学習会や一人一実践などを通し、なかなか自分自身だけでは気づくことのできないポイントや、授業を行っているなかで自分がなかなかできていないと思う部分の解決策のヒントになるようなことを発見することができ、良かったと思う。

校内研究の中で感じた授業改善における課題
(記述回答より)

- ・教科に関わっての指導法、本校の研究主題にある「学び合い」をどうリンクさせ、授業を行うかをより考えていくべきだと感じた。
- ・子供同士の考えを繋ぐ力や、教室全体を俯瞰して見る力が課題であると感じる。
- ・課題やめあての設定が、子供にとって分かりやすいものではないことがあるので、学習活動で何をすれば良いのか分かっていない状態になってしまうことがある。

校内研究により見えた今後取り組みたいこと
(記述回答より)

- ・深い教材研究をはじめ、様々な講演会などに積極的に参加し、具体的な実践をたくさん学んでいきたい。
- ・今後の授業においても、児童同士がお互いに関わり合い、問題解決していくことができるようなファシリテートをしていくことを意識していきたい。
- ・「対話力」を身に付けるための実践例を学び、児童・教師一人一人の成長につなげていく取組。

センター研究に関する意見・感想
(記述回答より)

- ・拡大校内研に向けては様々なアドバイスをいただき、自分の納得する授業の形になったと思う。
- ・学習会では、常にわかりやすく、すぐに実行できる内容をお話していただき、具体的な例を示していただき、有難かった。
- ・楡形西小学校の教職員が学び続ける教師となり、よりよい校内研を推進していくために、本校の研究のねらいを具現化できるように寄り添った支援をお願いしたい。

今年度の研究の成果と課題

1 成果

研究支援の成果として、以下の3点を挙げる。

1点目は、センターの研究支援として、推進校と連携を図りながら、研究推進校の教員一人一人の授業改善につながる校内研究会を目指し、学習会や授業づくり研究会を実施することができた点である。特に、1学期を中心に行われた学習会では、研究推進校のニーズに応じ、国語科や道徳科といった、教科指導についての学習会を実施することができた。夏季休業中の校内研究会においても、一人一実践の教科について、単元計画や授業構想など、研究推進校の教員と話し合いながら授業づくりをする校内研究会を実施することができた。

2点目は、センターが教科の専門的な部分を補完することで、より効果的な支援につなげることができた点である。研究推進校の研究方針として、一人一実践の授業を校内研究として位置づけ互いに参観し、その日のうちに研究協議を行った。教科担当の指導主事が授業づくりの段階から支援を行い、授業実践当日も研究協議に参加し、指導・助言を行った。教科としての専門的な部分を補完することにより、全教員の学びの場としての機会を確保でき、研究推進校の教員一人一人の授業改善に向けた支援を充実させることができた。研究推進校の教員一人一人の校内研究に対する意識も高く、一人一実践の授業をもとに自身の授業改善について考えることができていたため、より充実した校内研究となった。

3点目は「学びの充実シート」を活用し、毎回、校内研究会での自身の学びを振り返ることで、教員一人一人の省察する力が高まってきた姿を見取ることができた点である。2(2)授業改善に生かす具体的事例の項で示したように、振り返りの記述内容が焦点化されていたり、抽象的であった記述が具体的な表現になっていたり、変容を見取ることができた。また、2(3)「学びの充実シート」の有効性の項で示したように、研究推進校の教員の意見からも、校内研究での学びを振り返ることで、日々の授業改善に生かそうとする教員の姿が見られた。この点からも、本シートは授業改善の一助となったといえる。また、記述内容が蓄積されていくことで学びの過程を振り返り、自身の実践を見直すことにも活用されたこ

とからも、この「学びの充実シート」の活用が一定の成果を上げたと言える。

2 課題

研究支援の課題として、以下の2点を挙げる。

1点目は成果でも示した、「学びの充実シート」の活用目的・活用方法など、共通理解を十分に図ることができなかった点である。2(3)「学びの充実シート」の有効性で示したように、研究推進校と振り返りを行う意義を踏まえたシート活用の目的や負担感を少なくして継続していける方法の共通理解を図りながら、本シートの活用が充実していけるよう連携を図っていく必要がある。

2点目は、研究推進校のニーズに応じながら、さらによりよい学びにつなげていけるよう研究方針について連携を深めていく点である。これまでの研究推進校が継続して研究を進めてきた『学び合い』の実践の成果として見えている、児童の人間関係のよさを大切にしながら、目指す児童像の実現に向けた校内研究への支援を考えていきたい。

【研究推進校】

南アルプス市立楡形西小学校
校長 清水 ゆみ

【山梨大学連携・教育研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 河野 瑞穂
山梨大学 教授 渡邊 昭二郎
山梨大学 准教授 笠井 さゆり
山梨大学 准教授 樋川 裕幸

【総合教育センター研究アドバイザー】

教育研究推進幹 平沼 公香
主幹・指導主事 小保 善美